

学部教員と附属学校園教員とのC・T授業 (Collaborated Teaching) による ESD授業の開発(2)

伊藤 裕康・北堀 宏*・三野 健*
(社会科教育) (附属高松中学校) (附属高松中学校)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部
*761-8082 香川県高松市鹿角町394番地 香川大学教育学部附属高松中学校

Developing Lessons for ESD based on the Collaborated Teaching by an Attached School Teacher and University Teacher (2)

Hiroyasu Ito, Hiroshi Kitahori* and Takeshi Mino*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Takamatsu Junior High School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University,
394 Kanotsuno-cho, Takamatsu 761-8082*

要旨 大学教員と附属教員とのC・T授業(Collaborated Teaching)による2009・2010年度(以上(1)), 2011年度のESD授業開発(以上(2))の実際を報告する。大学教員と附属教員との年間を通じた連携による授業開発により, ①大学教員と附属教員とが対等に学びあう関係が構築され, ②①の関係の構築の上に, 公開研究会に向けて大学教員と附属教員とによるC・T授業に基づくESD授業開発がなされ, ③附属教員の学会への参加が見られるようになった。

キーワード ESD授業の開発 大学教員と附属教員の連携 C・T授業
世界地理と世界史の融合

(2) 附属教員による公開研究授業の開発

1) 研究主題について

① 世界地理と世界史を融合させる意義

インターネットや衛星放送などの急速な普及により世界のグローバル化が日々加速度的に進行している。生徒たちは、海の向こうで今その時起きた事象を、瞬時に目や耳にしている。例えば、世界各地の地震災害や気候変動による自

然災害、中東の政変やEUの金融危機などである。しかし、生徒たちはその背景にある世界の人々の価値観はもちろんのこと、世界の諸地域の歴史や文化についても十分に認識していない。

また、東日本大災害後の我が国では、エネルギーや消費経済の在り方、さらには自然との関わり方やライフスタイルという我々の生き方や

在り方の見直しが余儀なくされている。我が国における近代以降の欧米化は比較的穏やかで段階的な変容であった。しかし、戦後の高度経済成長に象徴されるわが国の変化は、日本人のものの見方や考え方を根本的にゆさぶり、まさに劇的な欧米化をもたらした。

今私たちは、我が国の歴史を正しく学び、自分たちのアイデンティティを再構築する必要に迫られている。そのためには、日本史を相対化する世界の諸地域の歴史を深く学ぶべきである。

グローバル世界で他国との協調や対立の中でたくましく生きていくために、また、現在の私たちの価値観や文化をより深く認識するために、世界の諸地域の歩みについて学び、より確かな世界的な社会認識を獲得させることは意義深いことと考えている。

② ヨーロッパ世界を学ぶ意義

ギリシャの財政危機がEUの金融危機へつながり、世界を震撼させている。通貨の統一など、主権国家による統合の象徴とされてきたEUが、今後の世界のあり方にまで影響を及ぼしている。

ヨーロッパ世界は、大航海時代、産業革命を経て近代以降の世界の地理的・一体化を主導するとともに、資本主義や自由貿易の拡大を助長し、経済的なグローバル世界を表出させた。また、市民革命による民主主義や人権思想の広まり、共産主義の台頭など、近代以降の世界中の人々の思想や文化、イデオロギーを主導し、変化させてきた。ヨーロッパ世界がその歩みの中で獲得してきた主権国家や条約の概念、国際組織の意義やしきみ等、現在の国際社会を規定する様々な考え方や仕組みも、世界が享受しているのである。まさに現代の私たち日本人の持つ思想や常識の多くは、ヨーロッパ世界の思想や常識を受け入れて成り立っている。私たち日本人がそのことに気づき、日本人としてのアイデンティティを継承し創造していくためにも、ヨーロッパ世界の地理的・歴史的概念を獲得することは意義深いものと考えている。

2) 研究方法

研究報告第3巻・第9号では、主に西アジア・北アフリカ地域、「イスラーム世界の歩みと今」の実践報告を行っている。研究方法を継続し、本年度は試案教科書「ヨーロッパ世界の歩みと今」を作成・使用し、授業を実施した。授業後に世界の諸地域についての地理的・歴史的知識や概念が身に付いたかどうか、ワークシートや定期テストの結果から分析する。また、事前と事後にアンケート調査を実施し、世界の諸地域の地理的事象とその歴史を関連させて学習したことで、現在の世界で起きている出来事を認識するうえで有用であったかどうか、未来志向科の学習において、ヨーロッパ世界の歴史を学んだことが活かされたかどうか検証する。

また、昨年度のイスラーム世界で行ったアンケートとの比較から、教材の改善について検証する。

3) 単元について

① 題材について

教科書や学習指導要領にはない世界の諸地域の歴史についての教材開発をするうえで、イスラーム世界での実践からの反省を生かし、以下の3点を重視して、試案教科書や資料の作成、授業の実践を行った。

- 汎用性が高く、より客観的な史実に基づいた教材とする。そのために、i 教科調査官、専門の大学教授や高校教育課の世界史担当者に指導を仰ぐこと。ii 複数かつ合意形成の図られた資料（高校の世界史の教科書や専門書など）を参考とすること。iii 資料の使用について、教科書会社の承認・協力を確認するとともに、指導していただくこと。
- 世界の諸地域の伝統や文化について、それらが形成された自然や風土などの地理的事象と関連づけた教材とすること。
- 世界の諸地域の価値観を尊重する態度を育成するため、宗教や慣習などの表面的な取り扱いを避け、その根拠や歴史的背景を認識できる教材とすること。

これらのことを踏まえ、「ヨーロッパの歩みと今」の教材を作成し、単元を設定した。

ヨーロッパがまとまった文化を發展させ、その内部で社会的、精神的な共通性が作り出される上で、古代ギリシャやローマの文明、およびキリスト教は極めて重要な役割を果たしてきた。このような古代のヨーロッパから、どのような過程を経て、民主主義や人権思想、資本主義や共産主義、主権国家や国際機関などの思想やイデオロギー、しくみや制度を獲得し、世界に浸透させたのかをさまざまな資料から認識させたい。世界の一体化のもと、日本を含む現代世界に浸透し、引き継がれたヨーロッパの人々の考え方や伝統を理解することによって、現代の世界をより正しくかつ深く認識できると考えている。

② 生徒の実態

ヨーロッパについて、2年生にアンケート調査(N=119)を年度当初に実施した。ヨーロッパ史についての知識を記述式で求めたところ、55名が「わからない」と答えた。記述している生徒についても、ローマ帝国やフランク王国、2度の世界大戦などの断片的な知識についての記述に限られていた。小学校社会科ではヨーロッパ史を扱っていないうえ、中学校社会科でも、ヨーロッパ史の取り扱いは、大航海時代以降であることから、ほとんどの生徒がヨーロッパ史の概要について理解していない。また、キリスト教についての質問に対しては、創始者イエスの記述が89名、カトリックとプロテスタントの対立に関する記述が21名、ザビエルやイエズス会についての記述が31名であり、1年時に実施したイスラーム世界でのイスラーム教についてのアンケート結果と比べると、個人差はあるものの、キリスト教については、多くの生徒が基礎的な知識を身につけていることが確認できた。また、EU(ヨーロッパ連合)についての記述も求めたが、ほとんどの生徒がその内容を正しく理解しておらず、予想以上にEUについての知識が身に付いていないことがわかった。

③ 指導上重要とする視点について

ヨーロッパ世界の歩みを理解する上で重要な視点として、以下の2点をおさえた学習指導を行う。

i キリスト教世界の特色、その移り変わり

の理解

ヨーロッパ世界が、キリスト教のもとで統一された一つの文化圏であるという理念や意識は、EUの成立・発展にもつながっている。古代ギリシア・ローマの成り立ちから、中世ヨーロッパの形成、さらにルネサンス、宗教改革を経る近世への移行、市民革命・産業革命以降の近代の表出など、ヨーロッパ世界の変革期には、キリスト教的な見方や考え方が大きな影響を及ぼしている。学習指導においては、キリスト教がヨーロッパ社会に与えた影響を、その変遷をたどらせることでわかりやすくつかませていくことが重要である。しかし、その際には、宗派の教えの内容などの細かい事象にとらわれないよう留意する。

ii 地理的・歴史的な理解

ヨーロッパ世界の広まりやヨーロッパ文化の浸透についての、地理的・歴史的な理解である。具体的には、古代から中世にかけてのヨーロッパ世界とイスラーム世界、東アジア世界との関わり、近世から近現代にかけてはヨーロッパ世界の進出による世界の一体化について、その歴史的な変遷と地理的な変容を重ね合わせて理解させることである。時間と空間の世界的な変容を理解させることで、より確かな世界的な認識を獲得させたい。

(4) 試案教科書について

イスラーム世界の実践では、事前のアンケート結果から生徒がイスラーム世界の歩みはもろんのこと、慣習や文化の背景について全くと言っていいほど、知識を有していなかったため、イスラーム世界特有の見方や考え方に気づかせることに主眼を置いた。一方、ヨーロッパ世界の価値観は、近代以降のわが国のあらゆる面に大きな影響を与え、日本人の生活や考え方を変容させてきた。ヨーロッパ世界の実践では、ヨーロッパ世界を特色づけると考えた以下の視点に主眼をおき教材開発、授業実践を行った。

①キリスト教的な見方や考え方

②ルネサンスに見られる人間的、合理的な考え方

③民主主義や人権思想の獲得

④経済や社会のしくみの構築(資本主義、共産



写真7 「ヨーロッパ世界の歩み」試案教科書

- 主義)
- ⑤対立と合意，統合と分裂の歩みの中で形成された国際的な概念（主権国家，国際条約，国際組織）
 - ⑥国家や民族に対する自己同一性

2 公開研究会の授業

(1) 公開研究会当日の指導案

2011年度は，ヨーロッパ世界の地理的事象や特色とそのあゆみを一体化した単元開発・実践を行った。まず，公開研究会の指導案（伊藤が一部改変）を以下に示す。

第2学年3組 社会科学習指導案

指導者 北堀 宏

1 単元名<ヨーロッパ州>「ヨーロッパ世界のあゆみ」

2 単元について

- (1) 教科内容の見直しとの関連(略)
- (2) 題材の考察

地図帳の見開きには，世界の国々を示した世界地図がある。そのページ中に，唯一拡大図が掲載されている州が，ヨーロッパである。ヨーロッパには比較的狭い範囲に多くの小国がひしめいており，その名称を書き込みきれないため，拡大図で示している。近代以降の世界の一体化を主導し，今日の世界を表出させたヨーロッパ諸国が，長い歴史の中で，それぞれの国家を存続しえたのはなぜか。ヨーロッパ史は対立と協調，征服と独立の歴史であった。その中で，小国家でも存続しえた要因を探ることは，現代世界の成り立ちを理解し，今後の国際協調のあり方を考える上で大いに参考となるとともに，新学習指導要領改訂の要点の一つでもある伝統や文化，宗教に関する学習の重視にもつながる。

ヨーロッパはユーラシア大陸の西端を占め，おおむね日本よりも高緯度にあるにもかかわらず，暖流と偏西風の影響で気候は比較的温和である。ヨーロッパがまとまった文化を発展させ，その内部で社会的，精神的な共通性が作り出される上で，古代ギリシャやローマの文明，およびキリスト教は極めて重要な役割を果たしてきた。まずは，ヨーロッパ独特の風土やあゆみについてさまざまな資料から認識させ，さらに，多くの小国が存続しえた要因について，地理的，歴史的に考察させたい。世界の一体化のもと，日本を含む現代世界に浸透し，引き継がれたヨーロッパの人々の考え方や伝統を理解することによって，現代の世界をより正しくかつ深く認識できると考えている。

- (3) 生徒の実態 (略)
- (4) 指導上の留意点
 - ① 学習指導について

ヨーロッパ世界のあゆみを理解する上で重要な視点として以下の2点をおさえた学習指導を

行う。まず一つは、キリスト教世界の特徴、その移り変わりの理解である。ヨーロッパ世界が、キリスト教のもとで統一された一つの文化圏であるという理念や意識は、EUの成立・発展にもつながっている。古代ギリシア・ローマの成り立ちから、中世ヨーロッパの形成、さらにルネサンス、宗教改革を経る近世への移行、市民革命・産業革命以降の近代の表出など、ヨーロッパ世界の変革期には、キリスト教的な見方や考え方が大きな影響を及ぼしている。学習指導においては、キリスト教がヨーロッパ社会に与えた影響を、その変遷をたどらせることでわかりやすくつかませていくことが重要である。しかし、その際には、宗派の教えの内容などの細かい事象にとらわれることがないように留意する。

二つ目は、ヨーロッパ世界の広まりやヨーロッパ文化の浸透についての、地理的・歴史的な理解である。具体的には、古代から中世にかけてのヨーロッパ世界とイスラーム世界、東アジア世界との関わり、近世から近現代にかけてはヨーロッパ世界の進出による世界の一体化について、その歴史的な変遷と地理的な変容を重ね合わせて理解させることである。時間と空間の世界的な変容を理解させることで、より確かな世界的な認識を獲得させたい。

また、試案教科書の作成においては、高等学校の世界史の教科書などを参考に、偏りのない資料によって客観性や公平性のある資料を準備し、それを中心にした教材の開発・学習指導に当たる。

② 評価について

地理的分野・歴史的分野を融合した単元であるため、各時間や場面で、どちらの分野の視点で評価するかを明確にする必要がある。「ヨーロッパ世界の風土」と「EUにまとまるヨーロッパ」は、地理的分野の視点から評価する。「ヨーロッパのあゆみ」は、歴史的分野の視点から評価する。単元全体としての評価は、各分野の評価を総括し、「ヨーロッパ世界」という大単元で、4つの観点での評価を実施する。

また、「社会的な思考・判断・表現」の観点については長期的なレベルを意識した評価規準にもとづいて実施する⁵⁾。2年生であるため、レベル4の「現在とのつながりと関連づけながら」判断できているかどうかを中心に評価し、指導に生かす。

3 単元の目標及び指導計画と評価規準

(1) 目標

- ① ヨーロッパの風土や民族などの地理的事象や、ヨーロッパ世界の歴史的事象に対する関心を深め、その地域的特色や歴史的背景について理解し、その知識を身につける。
- ② ヨーロッパの地域的特色を、地理的事象を的確に把握できる主題や歴史的背景を見いだせる課題について資料を適切に選択して読み取り、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。

(2) 単元の評価規準

社会的な事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	資料活用技能・表現	社会的な事象についての知識・理解
ヨーロッパの風土や諸民族などの地理的事象に対する関心を深め、地域的特色を意欲的に追求し、とらえようとしている。 ヨーロッパの歴史的事象に対する関心を高め、意欲的に追究するとともに、ヨーロッパ世界の特徴について考えようとしている。	ヨーロッパの地域的特色を、人々の生活のようすを把握できる主題を基に多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。 ヨーロッパ世界の歴史的事象から課題を見いだし、ヨーロッパ世界の特徴を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	ヨーロッパの地域的特色に関する様々な資料から有用な情報を適切に選択し、地域的特色を読み取ったり、図表などにまとめたりしている。 ヨーロッパ世界の歴史的事象に関する様々な資料から有用な情報を適切に選択して読み取ったり、図表などにまとめたりしている。	ヨーロッパに暮らす人々の生活のようすを的確に把握できる主題をもとに地域的特色を理解し、その知識を身につけている。 ヨーロッパ世界の歴史的背景について理解し、その知識や概念を身につけている。

(3) 学習指導計画 (○新指導要領の内容 ●教科の見直しによる新しい大単元)

平成20年度中学校学習指導要領社会

地理的分野 (主に世界地理)

[世界の様々な地域 (計25時間)]

- アジア (6時間)
- ヨーロッパ (5時間)
- アフリカ (3時間)
- 北アメリカ (4時間)
- 南アメリカ (4時間)
- オセアニア (3時間)

歴史的分野 (主に世界史)

- 古代までの日本
東アジアの文明・三大宗教の誕生
- 中世の日本
東アジアの国際関係 (元寇・勘合貿易・琉球の国際的役割)
- 近世の日本
ルネサンス・宗教改革・大航海時代・欧米諸国の接近
- 近代の日本と世界
市民革命・産業革命・欧米の世界進出・二つの世界大戦
- 現代の日本と世界
冷戦・冷戦の終結・多極化する世界

本校社会科の目指す融合単元

世界地理(地理的分野)と世界史(歴史的分野)

[世界の様々な地域とその歩み (計39時間)]

- アジア世界 (8時間)
(歴史は東アジア・南アジア・東南アジアに分けて実施)
 - イスラーム世界 (6時間)
 - ヨーロッパ世界 (10時間)
 - ・ヨーロッパの位置と自然
 - ・ヨーロッパの民族と文化
 - ・ヨーロッパ世界のあゆみ 古代
 - ・ヨーロッパ世界のあゆみ 中世
 - ・ヨーロッパ世界のあゆみ 近世
 - ・ヨーロッパ世界のあゆみ 近代(2時間)
 - ・ヨーロッパ世界のあゆみ 現代(2時間)
 - ・ヨーロッパのあゆみのまとめ (本時)
 - ・EUにまともるヨーロッパ (2時間)
 - 南北アメリカ世界 (7時間)
 - オセアニア世界 (4時間)
 - アフリカ世界 (4時間)
- ※ 世界の様々な地域の学習に、それぞれの地域の歴史を一体化した単元として、実施する。よって、歴史的分野における世界史に関する内容を、歴史的分野から削減する。

4 本時の学習指導

(1) 目標

- ヨーロッパ世界が形成された歴史的背景について意欲的に追求するとともに、その要因を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現することができる。

(2) 本時の評価

社会的な関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現
<p>○ ヨーロッパ世界が形成された歴史的背景について、意欲的に追究している。</p> <p>Aの例 資料を意欲的に読み取ったり、級友と意見交換したりして、班活動の中心的存在となって課題を追究している。</p> <p>Cの例とその改善の手立て 自ら意欲的に調べようとせず、資料や他生徒の調べたことをそのまま書き写している生徒に対し、自分で考え調べたりまとめたりする力が、公民として身につけなければならない重要な資質であることを伝える。</p>	<p>○ ヨーロッパ世界の成り立ちについて歴史的背景を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現できている。</p> <p>Aの例 ヨーロッパ世界が形成された歴史的背景を多面的・多角的に考察して適切に表現し、異文化を客観的に公正な評価をしている。</p> <p>Cの例とその改善の手立て ヨーロッパ世界の成り立ちについて歴史的な背景を考察する視点がわからず、誤った評価をしようとしている生徒に対し、ヨーロッパの歴史や文化を公正に評価・分析した別資料を配付し修正を促す。</p>

(3) 準備物

- ・ 試案教科書 ・ ワークシート ・ 各種資料 ・ ヨーロッパ州地図 ・ 教材提示装置 ・ ホワイボード数枚

(4) 学習指導過程 (○指導上の配慮事項 ●おおむね満足できると判断できる状況 [] 評価方法)

学習の流れ	学習内容及び活動	指導上の留意点
	<p>1 ヨーロッパの古代～近代の特色について振り返る。</p> <p>2 学習課題を確認する。</p> <p style="text-align: center;">ヨーロッパ世界で、多くの小国家が存続できたのはなぜか。</p> <p>3 多くの小国家がひしめきあって存続できた理由を、予想する。 ○文化や民族の尊重 ○地理的な諸要素 ○キリスト教の影響</p> <p>4 いくつかの視点から調べ、学習課題について検証する。 ○歴史的な諸要素 ・各時代の特色から ・思想や考え方から ・政治、経済など複数の側面から ○地理的な諸要素 ・気候、風土、民族、言語 (1) 各自で考える。 (2) 班ごとに調べ、話し合う。 (3) 発表して学級全体で分析し、課題の答えに迫るヨーロッパの特色や考え方を知る。 ○変化に富んだ地形や自然 ○宗教上(キリスト教)の同一性と寛容 ○都市国家や諸侯領の名残 ○主権国家の概念の獲得(民族の自決) ○ヨーロッパの経済力 ○繰り返す大戦や多くの犠牲への反省 ○文化や伝統への愛情</p> <p>5 まとめ</p>	<p>○ これまで学習してきたヨーロッパ世界についての歴史を振り返ることによって、ヨーロッパ世界の理解が、過去および現在の世界を理解する上で重要であることを確認する。</p> <p>○ 世界地図ではヨーロッパのみが拡大図が示されていることから、他の地域に比べ小国家が多く存続していることに気づかせ、課題に対する意欲を喚起する。</p> <p>○ これまでの学習から、ヨーロッパ世界が育んできた見方や考え方、地理的な要素について振り返るよう助言する。</p> <p>社会的な関心・意欲・態度</p> <p>● 資料を意欲的に読み取ったり、級友と積極的に意見交換したりして、課題を追究している。 [発表、ワークシート]</p> <p>○ 自分の予想について検証し、課題に対する答えを追究させるが、予想にこだわらずに、追究していく過程で見えてきた考えを大切にしよう助言する。</p> <p>○ 答えは一つではなく、いくつかの要素が絡む複合的なものであることを伝え、考察が短絡的に終わっている生徒に、他の視点からも考察し、考えを深めていくよう支援する。</p> <p>○ 考察の視点が定まらず滞っている生徒に対しては、課題解決のヒントとなる視点からヨーロッパの歴史を分析した資料を配付し、修正を促す。</p> <p>○ 発表においては、生徒の自由な発想を大切にしながら、ヨーロッパの人々が、苦難の歴史から勝ち取った、民主主義、人権、平和、民族の自決、異文化の尊重などの価値観を拾い上げ、われわれが学ぶべき見方や考え方に気づかせるよう留意する。</p> <p>社会的な思考・判断・表現</p> <p>● ヨーロッパに多くの国がひしめき合っている理由について、その歴史的背景を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現することができている。 [発表、ワークシート]</p>

(2) 大学教員からの公開研究会授業検討会でのコメント

① 単元における本時の問い「ヨーロッパ世界で、多くの小国家が存続できたのはなぜか。」の位置づけ

本単元の指導計画は以下の通りである。本時は、それまでの学びを想起させて活用し、本時の問い「ヨーロッパ世界で、多くの小国家が存続できたのはなぜか。」に迫らせる展開であった。それならば、単元冒頭に本時の問い「ヨーロッパ世界で、多くの小国家が存続できたのはなぜか。」を位置づけたい。なぜならば、当然

冒頭ではこの問いは解けない。従って、生徒は本時（第10時）に至るまでに、本時の問いを絶えず意識して学習することとなる。

② 単元の冒頭に位置づけたい大きな問い

①で述べたことを世界の学習全体に敷衍すれば、各地域の学習に入る度に、「現代におけるその地域の特徴は何か。そのような地域の特徴がみられるようになったのはなぜか」といった類の大きな問いを冒頭に位置づけたい。そうすれば、当然各地域の学習の冒頭ではこの問いは解けないから、生徒は単元の最後までこの大きな問いを意識して学習することが可能となる。

時	学習課題	獲得すべき概念的知識	資料
第1時	ヨーロッパの位置・地形・気候の特徴をつかもう	ユーラシア大陸における位置と範囲、日本との距離、緯度・経度による位置関係、国際河川やアルプス山脈など起伏に富んだ地形、高緯度の割に温暖な気候と海流や偏西風との関係	地図帳・写真・降水量と気温の変化
第2時	ヨーロッパの宗教（宗派）・言語・民族の分布の特徴をつかもう	大きく3つに分かれるキリスト教の宗派（カトリック・プロテスタント・ギリシャ正教）、言語、民族（ラテン系・ゲルマン系・スラブ系）の分布とその関係性	宗派別分布図、言語の分布図、宗派別寺院の写真
第3時	古代ギリシャ、ローマの人々の思想や考え方に迫ろう	ギリシャ都市国家の直接民主制や哲学に見られるヒューマニズム、ユダヤ教とキリスト教の関係、ローマ帝国の国教となったキリスト教の教えの概要	ポリスのようす、代表的な哲学、イエスの肖像画、水道橋
第4時	ヨーロッパの中世を日本の中世と比較し、その特徴をつかもう	教皇の権力とそのもとに形成されるヨーロッパ世界、身分制度の確立と契約社会の成り立ち、十字軍によるヨーロッパ世界とイスラーム世界の対立と交流	忠誠を誓う騎士、三圃制、中世封建社会の構造図
第5時	ヨーロッパ人が、世界に進出できたのはどうしてか	ルネサンスによるヨーロッパ世界のめざめ、科学技術の進歩による社会の変化、宗教改革によるカトリックの世界進出、一体化に向かう世界、隷属を強いられる先住民	世界地図、三美神の比較（古代・中世・ルネサンス後）、三大発明について
第6時	近代的なまとまりのある「国家」はどのようにつくられたのか	国王の絶対的な権力のもとにまとまる国家、主権国家の登場、国際会議や条約の概念、相次ぐ市民革命による人権尊重や国民主権の考え方の獲得	ベルサイユ宮殿、フランス人権宣言、肖像画数点、フランス革命の様子
第7時	世界に先駆けてイギリスで産業革命が始まったのはなぜか	蒸気機関の開発による機械の登場と産業革命、資本主義世界の登場、労働問題や公害の発生、社会主義思想のめざめ、ナショナリズムの台頭と帝国主義の展開	英印の綿布の輸出入の変化グラフ、蒸気船の絵、世界地図、公害と労働問題について
第8時	2人の死が、なぜ「世界大戦」にまで広がったのか	植民地拡大をめぐる対立する近代国家、第一次世界大戦前後の状況、新兵器の登場による戦死者数の増大、社会主義革命の成功、多大な犠牲の反省と国際連盟の創設、ドイツへの報復	歴史地図（大戦中）、バルカン半島風刺画、新兵器の映像、ベルサイユ会議の様子、ドイツへの手紙
第9時	大戦終結からわずか20年で再び世界大戦が始まったのはなぜか	世界経済の一体化による恐慌と独善的な対策により深まる対立、ファシズムの台頭とポピュリズムの欠点、第二次世界大戦の展開、戦後の激しいイデオロギー対立による冷戦構造と核抑止力	歴史地図（戦中・戦後）、ヒトラーの演説及びその映像、世界大戦における犠牲者数のグラフ、収容所の様子
第10時	ヨーロッパ世界で多くの小国家が存在しているのはなぜか	変化に富んだ地形、古代の都市国家や中世の諸侯領の枠組み、主権国家の尊重、民族や伝統への誇り、キリスト教世界の一体感、大戦による犠牲への反省	ベネルクス三国の関係と複雑な国境について
第11時	ヨーロッパ諸国は、どのようにE Uとしてまとまったのか	大戦による犠牲からの反省、安全保障の枠組みの模索、経済競争力の向上、国際的地位の向上、キリスト教世界の一体感、リジョナリズム（地域主義）の進展	年表、地図、E Uと米国、日本との比較グラフ、E U憲章、
第12時	E Uの統合は加盟国の人々の生活をどのように変化させたのだろうか	経済的統合が進展、統一通貨ユーロ、自由な移動、医療・教育・資格などの共有化、交通網の発達、文化や伝統の保全、国境を越えて展開する多様な産業	ヨーロッパ内の観光客・労働者の移動、航空機の共同生産
第13・14時	特色と課題を調べ、課題の解決策を考えよう	①地域間格差の広がり、②イスラーム国トルコの加盟の是非、③金融統合によるひずみ、④雇用問題によるナショナリズムの高揚、などの課題への対立から合意へのプロセス、今後の日本に生かすべき見方や考え方	新聞記事、(ギリシャ財政危機・トルコ加盟問題・ノルウェーの国民投票)、各国の平均賃金

③ 公民的分野の最後の内容「イ よりよい社会を目指して」との関連

「世界的な社会認識をもとに、持続可能な未来を志向する社会科教育のあり方」を探るならば、世界地理と世界史との関連を図るだけでなく、中学校社会科の最終の内容であり、ESDの考えが盛り込まれている「イ よりよい社会を目指して」との関連を図ることの必要性があることを指摘した。それには、カリキュラムレベルでの検討が必要となってくる。

(3) 授業実践の考察と成果

① 授業及びワークシートから

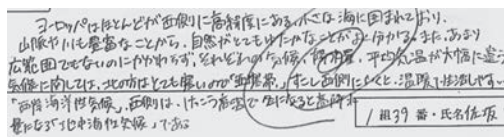
ヨーロッパの歩みの授業では、予想以上に関心を示す生徒が多く、特に古代ギリシャの哲学、中世ヨーロッパの教皇、国王、騎士の関係などの内容への興味が高かった。



写真8 第10時の授業の様子

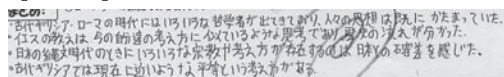
単元目標①について、その達成を判断できるワークシートの事例を以下に示す。

【第1時】ヨーロッパの舞台（気候・地形・自然）



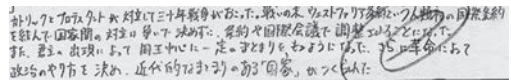
ヨーロッパの地形や気候などの地理的な特色が適切にまとめられている。単元目標②について、その達成を判断できるワークシートの事例を以下に示す。

【第3時】



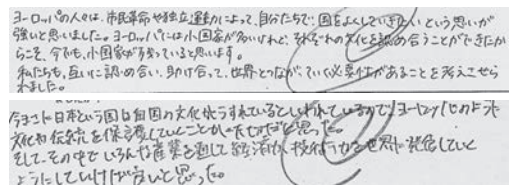
古代ギリシャの民主制、イエスの教えについて、適切にとらえている記述がある。

【第6時】近代国家の登場・主権国家の成立



ヨーロッパが宗教戦争を経て、国家のまとまりを強め、互いの主権を尊重する枠組みを作ったことがまとめられている。

【第10時】ヨーロッパ史から学ぶべきことは何か



ヨーロッパの歴史の特色を、政治・経済・文化な多面的・多角的にまとめることができている。

② アンケート結果から

授業前後に同じ内容のアンケート調査を実施した。主な質問項目、結果の比較は以下の通りである。

【質問項目】

- ア 日々の生活の中で、日本以外の世界の諸地域で起きているできごとに関心をもって聞いたり、考えたりしていますか。
- イ 世界の歴史を学習することは、地球温暖化などの環境問題を解決したり、これからのわが国のあり方を考えたりする上で大切であると考えますか。
- ウ 現在の私たち日本人の生活・文化や思想と、西洋（主にヨーロッパ）の人々の生活・文化や思想は、深く関わっていると考えますか。

【結果の比較】

項目	実施前 (119名)		実施後 (120名)	
	はい	いいえ	はい	いいえ
ア	75%	25%	88%	12%
イ	85%	15%	90%	10%
ウ	42%	58%	93%	7%

アの質問は、「はい」と答えた生徒数が13%増加した。ヨーロッパの学習によって、世界の諸地域のできごとに関心を持つ生徒が増加したと考える。イの質問は、「はい」が5%増加し、

ヨーロッパの歩みを学習したことで、今日的な課題を解決するうえで、世界の諸地域の歴史を学習しておくことが大切であるとする生徒が増加したことがわかる。

もっとも大きく変化したのがウの質問項目である。本学習を実施する前には、ヨーロッパと現在のわが国の生活・文化や思想とヨーロッパの関連は深くないと考える生徒が多かったが、学習後は、民主主義、人権思想、主権国家や国際条約の概念など、私たち日本人が大切にしている見方や考え方の背景には、近代以降世界を席卷したヨーロッパの生活・文化、思想が深く関係していることを認識したことがわかった。

③ 成果

アンケートには、事前と事後に同一の問いを設定していたが、事後のアンケートには学習についての感想やわが国との関わりについての意見を求めた。

- | |
|--|
| <p>ア 昨年度のイスラーム世界の学習と、本年度のヨーロッパ世界の学習によって、現在の世界で起きているできごとのとらえ方は変化しましたか。変化した場合にはどのように変化しましたか。</p> <p>イ ヨーロッパ世界の学習から、現在のわが国の生活・文化や思想と、ヨーロッパの生活・文化や思想との関わりについてどのような考えを持ちましたか。</p> |
|--|

アンケートの答えの中には、昨年度のイスラーム世界、本年度のヨーロッパ世界の学習によって、今日的な諸課題の背景がより深く理解できたという記述が多く見られた。また、わが国の文化や伝統を見直す機会になったという意見も多く見られた。イの問いに対するある女子生徒の意見である。

- | |
|---|
| <p>自分たちが当たり前だと思っている思想の多くが、もとはヨーロッパの人たちの考え方であることに気づきました。ありがたいものもあるけれど、もう一度自分たちの伝統や文化を見直すべきだと思えます。ヨーロッパは今でも昔の町並みや風景が残っています。日本は昔の町並みが残っているところがどんどんなくなっています。ヨーロッパの人たちの文化や伝統に対する愛情を見習って、日本の伝統や思想を大切にしていきたいと思えます。</p> |
|---|

昨年度のイスラーム世界を含め、今後一層グローバル化が進むであろう国際社会の中で、世界の諸地域の歴史を中学生で学習する意義は大きかったと考えている。

Ⅲ 終わりに

研究の成果は、以下の通りである。

- ① 附属高松中学校公開研究会の授業検討に、大学教員が公開前から参画するだけの信頼関係の構築

附属学校教員と大学教員との信頼関係の構築がないなら、公開研究会以前から研究授業の検討に参加することは難しい。信頼関係の構築には、研究交流を軸とした地道な連携の積み重ねが必要である。2009年度及び2010年度は信頼関係を構築する醸成の時であった。

- ② 大学教員と附属教員とのC・T授業によるESD授業開発

①における附属学校教員と大学教員との信頼関係の構築を受け、2011年度は、とにもかくにも事前に開発したヨーロッパの試案教科書の作成と、それを用いてESDの視点を踏まえたヨーロッパの授業を公開研究会で公開することができた。

- ③ 附属学校教員の学会参加

よく研究会に参加する附属学校教員も、学会への参加は、ほとんどは見られない。しかし、学会は、研究会と異なり、学習指導要領にとられない研究が多く、附属学校教員の教科指導の枠を広げることに資することができる。本研究の活動により、学会への関心を高めたようである。2009年度は、附属高松中学校三野教諭が伊藤とて2010年2月に開催された社会系教科教育学会に参加し、刺激を受けてきた。2010年度は、附属高松中学校三野教諭と伊藤とて2010年11月の日本社会科教育学会筑波大会に参加し、さらに、2011年2月に開催された社会系教科教育学会に参加して、社会科教育の動向や社会科教育におけるESDの動向など、最新の情報にふれてきた。

研究課題として、第一に開発した授業の精緻

化と、それを踏まえてのカリキュラムレベルでの検討が挙げられる。第二として、未来志向科とも連携したESD社会科授業の開発が挙げられる。

注

- 1) ESDの日本語表記として、外務省と環境省は「持続可能な開発のための教育」を用い、文部科学省は「持続発展教育」を用いている。
- 2) 両実践の詳細は、北堀(2011)三野(2011)を参照。
- 3) 同実践の詳細は伊藤(2011)を参照。
- 4) 望月(2006, 13)は、「ヨーロッパでは、小国や都市国家が激熱な戦争や競争をしてきた。相手に飲み込まれないようにする為には、独自の政治機構、文化や技術が必要である。そして、その国や地域の人間であることを確認するアイデンティティがもっとも大切になる。ヨーロッパの都市を訪れると、古い街並みや地場産業が驚くほどに入念に手を入れ残されている。それは自らのアイデンティティを立証する為である。」と述べている。また、田中(2007, 196)は、第2次世界大戦後に、国家の概念が、軍事力・経済力などのハードパワーから文化・メッセージ性などソフトパワーへと重心を移行しつつあることが、ミニ国家には有利に働いていることを指摘している。
- 5) 歴史的分野を中心とした場合、以下の図のように「社会的な思考・判断・表現」の観点については長期的なレベルを意識した評価基準を考えている。詳細は、香川大学教育学部附属高松中学校(2011)を参照。

文献

- 伊藤裕康・安藤孝泰「物語性と当事者性の高い社会科地理学習—文脈のある授業展開を心がけた『小京都』の実践より—」日本社会科教育学会編『社会科授業力の開発 中学校・高等学校編』明治図書、pp. 31-46, 2008
- 伊藤裕康「情報消費社会における社会科地理学習のあり方—持続可能な社会の形成を目指す子ども参加の地理学習を例として—」地理学研究 No.6, pp. 15-24, 2010
- 伊藤裕康『『物語(り)』としての『伝統』—社会科地理学習における伝統の扱い方—』社会科教育研究114, pp. 77-90, 2011
- 伊藤裕康・北岡隆「大学教員と附属教員の連携によるESD授業の開発(1)—「世界自然遺産『屋久島』探訪』の授業開発—」香川大学教育実践総合研究第21号, pp. 87-95, 2010a
- 伊藤裕康・北岡隆「大学教員と附属教員の連携によるESD授業の開発(2)—「世界自然遺産『屋久島』探訪』の授業開発—」香川大学教育実践総合研究第21号, pp. 97-106, 2010b
- 香川大学教育学部附属高松中学校『香川大学教育学部附属高松中学校研究報告第3巻第9号』p. 124, 2011
- 桂博章・平良木美樹子「学部と附属中学校の共同研究の試み—ゲストティーチャーによる身体経験を通じた郷土の芸能の学習—」日本教育大学協会研究年報第28集, pp. 47-59, 2010
- 北堀宏「戦後日本の成長と国際関係—高度経済成長と持続可能な社会—」伊藤裕康・田中健二・日誌裕雄・高倉良一・松本康・山下孝章編『社会への扉を拓く—あなたとつくる生活科・社会科・総合

評価規準例 (社会)：よりよい社会の実現に向けて、習得した知識を活用して多面的・多角的に考察する。					
レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5	レベル6
「中世の日本」(歴史)	「近代の日本と世界」(歴史)	「よりよい社会を目指して」(公民)			
中世の特色を多面的・多角的に考察している。	中世の特色を多面的・多角的に考察し、事象相互の関連を捉えている。	近代の特色を多面的・多角的に考察し、公正に判断している。	近代の特色を多面的・多角的に考察し、現在のつながりと関連付けながら公正に判断している。	持続可能な社会を形成するために解決すべき課題を見だし、対立と合意、効率と公正などの視点から多面的・多角的に考察し、公正に判断している。	持続可能な社会を形成するために解決すべき課題を見だし、歴史的分野で習得した知識や技能を生かして多面的・多角的に考察し、対立と合意、効率と公正の視点をもとに公正に判断している。
1年B	1年A	2年B	2年A	3年B	3年A
1年生で達成するレベル		2年生で達成するレベル		3年生で達成するレベル	

(香川大学教育学部附属高松中学校, 2011)

- の物語一』 pp. 208-214, 美巧社, 2011
- 波澤文隆「国際理解のため世界的分野の創造と実践
—中学校分野制社会科の再編成を日ざして—」社会科教育研究 No.45, pp. 25-38, 1981
- 全国地理教育学会地理歴史科研究小委員会「高校地理歴史科における地理・歴史の関連, 融合について」地理教育研究 No.1, pp. 95-98, 2008
- 田中義皓『世界の小国 ミニ国家の生き残り戦略』講談社, 230p., 2007
- 西崎緑「福岡教育大学における大学学部と附属学校園との連携（その2）—大学教員の附属小学校での授業事例—」, 教科教育学研究第20集, pp. 25-36, 2002
- 別枝篤彦『世界の風土と民族文化』帝国書院, 334p., 1989
- 三野健「持続可能なまちづくりと公共交通～新時代の高松のまちを構想する～」伊藤裕康・田中健二・日詰裕雄・高倉良一・松本康・山下孝章編『社会への扉を拓く—あなたとつくる生活科・社会科・総合の物語—』 pp. 215-222, 美巧社, 2011
- 望月照彦「ここにしかない個性的な地域創造へ—地域の遺産を磨き財産へ—」日本地域資源学会監修『地域文化資本の時代』地域経営研究所, pp. 8-14, 2006
- 山口幸男「中学校社会科 新教材のチャームポイント〈地理編〉地理学習の中心としての『日本地誌学習』（日本の諸地域学習）を大きく発展させよう」社会科教育 No.612, p. 105, 2010